

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 小林正法

ネガティブな出来事の記憶は精神的な健康と大きな関係がある。ネガティブな記憶をなかなか忘れられないことが心理的な不適応をもたらすことは、うつ病やPTSD（外傷後ストレス障害）などでも認められる。うつ病においては、ネガティブな記憶を思い出すこと（ネガティブな記憶の侵入）によって、ネガティブ気分が誘導され、その誘導されたネガティブ気分が気分一致バイアスを通じて、ネガティブ気分を持続させるという負の循環が見られる。こうしたことから、ネガティブな記憶を思い出さないようにすること（抑制）は、精神的な健康を増進する意義を持つ可能性がある。

本論文は、ネガティブ記憶の抑制が可能かどうかを認知心理学の実験から検討したものである。その際に、抑制に対する意図性に着目し、抑制意図の有無別（意図的抑制、非意図的抑制）に検討した。記憶の意図的な抑制手法には、Think/no-think 課題による意図的抑制を用いた。Think/no-think 課題による意図的抑制とは、抑制対象の手がかり提示に対して、抑制対象を意図的に抑制することで抑制が生じる現象である。一方で、記憶の非意図的な抑制手法には、検索誘導性忘却を用いた。この現象は、ある記憶（検索対象）の検索が関連する他の記憶（抑制対象）を非意図的に抑制するというものである。

本論文は、2つの研究と6つの実験から構成されており、第1章（研究1）では記憶の意図的抑制現象を扱い、第2章（研究2）では記憶の非意図的抑制現象を扱った。その後、総合考察として両現象の共通点に対する議論を行った。

第1章（研究1）では、実験1、2を通してニュートラル単語記憶、ネガティブ単語記憶のそれぞれに対する意図的抑制を扱った。ここでは、思考生成方略と呼ばれる「抑制対象の記憶の手がかりに直面した際に、手がかりから（抑制対象とは）異なる思考内容を連想し、考える」という方略の効果を検討した。実験1では、ニュートラル語記憶の意図的抑制において、「方略なし」群と「思考生成方略」群の比較を行い、思考生成方略の有効性を検証した。その結果、思考生成方略を与えた群でのみニュートラル語記憶の意図的抑制効果が確認された。抑制対象をネガティブ語記憶とした実験2でも同様に、思考生成方略群でのみ意図的抑制効果が確認された。この結果から、方略を与えない場合に比べ、思考生成方略がニュートラル、ネガティブ単語記憶の意図的抑制に有効であることが明らかにされた。

第2章（研究2）では、実験3、4、5を通してネガティブ単語記憶の非意図的抑制を扱った。実験3では、エピソード記憶の検索によるネガティブ単語記憶の検索誘導性忘却を

検討した。この実験では、検索対象がエピソード記憶となっていた。実験 3 の結果、エピソード記憶の検索によるネガティブ単語記憶の抑制は確認されなかった。これまでの先行研究ではエピソード検索によるネガティブ単語の検索誘導性忘却が可能とするものと、不可能とするものが存在し、結果が混在していた。実験 3 の結果から、ネガティブ単語記憶の非意図的抑制が困難であることが示された。続く実験 4 では、意味記憶の検索によるネガティブ単語記憶の検索誘導性忘却を検討した。この実験では検索対象が意味記憶となっていた。実験 4 の結果、ネガティブ単語記憶の検索誘導性忘却が確認され、意味記憶の検索はネガティブ単語記憶の非意図的抑制を導くことが明らかにされた。さらに、実験 5 では、実験 3、4 の実験手続きの違いに着目し、ネガティブ単語記憶の検索誘導性忘却における境界条件を明らかにするという目的で実験 5-1、5-2 を行った。実験 5-1 では検索対象をテストしないという条件での検討、実験 5-2 では偶発学習を用いた検討をそれぞれ行った。実験 5 の結果、学習時にネガティブ単語同士を結びつけて学習するという「エピソード統合」を偶発学習により阻害した場合（実験 5-2）、ネガティブ単語の検索誘導性忘却が見られることがわかった。研究 2 の一連の実験から、エピソード統合によって検索対象と抑制対象の類似性が高まることがネガティブ単語の検索誘導性忘却が阻害することが明らかになった。

本論文においては、次の点が高く評価された。

1. 記憶の抑制において抑制意図に注目し、抑制に対する意図がある場合とない場合のそれぞれで記憶の抑制を実現する手法を検討するという多面的なアプローチを行ったことである。そのうえで、抑制に対する意図がある場合（意図的抑制）、ない場合（非意図的抑制）ともに、抑制対象と関連する思考内容を考える（思い出す）ことが抑制に有効であることが明らかになった。しかし、抑制対象の相互関連性が高い思考内容考えた場合は抑制が生じないという可能性も得られた。
2. 非意図的抑制についての先行研究では結果が混在していたが、本研究では、多くの実験的検討を通して、ネガティブ記憶の抑制を阻害する要因を初めて特定した。このことは心理学的に高く評価された。
3. 本研究は実験室的な基礎研究であるが、ネガティブな記憶の抑制を実現させる心理学的方法について確実な知見を与え、臨床心理学的な治療や予防の技法へと応用する道を開いたことも評価された。

なお、第 1 章の一部は「教育心理学研究」誌に公表済み、第 2 章の一部は「Memory」誌に公表済みである。

これらの成果により、本論文は、博士（学術）の学位に値するものであると、審査員全員が判定した。